

国語科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 言葉には世界を変える力がある。友達の何気ない一言が塞ぎ込んだ心を軽くしたり、自分の言葉が誰かを笑顔にしたり、ふと耳にした一言が、その人の生き方を大きく変えることもあるだろう。昔の言葉や文章が、時代を超えて私たちの胸を打つこともあるように、言葉の力はその時代だけで完結するとは限らない。月の世界に思いを馳せた時代に、幻想的な世界を言葉で紡いだように、言葉は現実とは違う世界を織り成し、私たちの心を躍らせることもできる。誰かの思いが込められた言葉は人から人へ影響を与え、いつしか想像を超えた結果をもたらすこともあるだろう。言葉は技術の進歩と共により速く、広く、簡単に多くの人に届くようになってきた。今後も言葉は影響の形を変え続け、私たちの世界に影響を与え続けるだろう。

10 私たちは、テンポよく円滑なコミュニケーションを行う際に、瞬間的に言葉の選択を行う。便利で汎用性のある表現もよく使われる。一方で、相手に自分の思いを適切に伝えたいと感じたとき、自分の発する言葉を見つめ直すことも求められるだろう。誰に、何のために、どんな言葉を用いるのかを思い描くこと、どのように相手に伝わるのかを想像すること、相手の心を動かすのに最適な言葉を探そうとすること、発する言葉には幅があり、アプローチも複数あること。そういったことを考え、言葉を選ぶことが他者の心に思いを届けることにつながる。

15 また、言葉を受け取る際も、用いられた言葉を吟味することが大切である。言葉や文章、その構成から適切に要旨をつかむこと、さらには言葉の奥にある相手の心情や意図に思いを巡らせたり、想像力を膨らめたりすること。このようなことが相手を受け入れ、互いにわかり合えるきっかけとなる。

20 このように、一歩立ち止まって自分の思いや考えを伝えるために言葉を選択したり、他者の思いや考えを感じとったりしていくことは、言葉の価値に目を向け、言葉を大切にしている姿であり、豊かな言語感覚をもつ人といえる。きっと、そのような人は、言葉を通してその心のあり様も豊かになり、自分の行動や世界の見え方までもが変わってくるだろう。そして、豊かな言語感覚をもつ人の人生は彩り深いものになっていくといえるだろう。

25 以上のことから、子どもたちには「豊かな言語感覚をもつ人」に成長してほしいと願っている。

2 教科で願う学び

30 私たち国語科が願う学びとは、「言葉を吟味し言語感覚を磨くことと、言葉を介して考えや価値観を更新することと、それらを往還すること」である。

題材に出会った子どもたちは、その世界を味わいながら、言葉の意味や表現の意図について考えたり、そこに描かれる人々の思いや筆者の主張をとらえたりしながら、自分の考えを構築していく。

35 言葉を吟味するとは、言葉によって作られた世界に浸る中で、言葉が持つ多様な意味から文脈に相応しい意味を考えることである。また、文章中のどの言葉に注目するか、どの言葉とどの言葉を結びつけるかを考え、形成された自分の考えをどう伝えるか、さらに、他者の考えをどう自分の考えと重ね合わせていくかという視点をもってよりよい言葉を選ぶことでもある。言葉にしようとすることで、自分の考えを見直し、より深く掘り下げることもある。考えを言葉にする過程でうまく表現できないことに気づき、思考がさらに深まったり、言葉になった考えと向き合うことで、客観的な視点が働き、思考がさらに促されたりすることもある。このように、言葉と思考には深い関係がある。言葉を吟味する中で言語感覚は磨かれ、言語感覚が磨かれることで新たな言葉の吟味が生まれる。

40 その繰り返しの中で子どもたちは、自分の読みの解釈をつくり出し、更新していく。また、他者と交流することで、新たな読みの解釈にふれ、何度も言葉や自分の解釈と向き合うことになる。子どもたちは言葉と真剣に相対する中でその感覚を磨き、「豊かな言語感覚をもつ人」へと近づいていくだろう。そして、言葉の世界に浸り、題材に対して十分に思いをもった子どもたちは、題材に描かれる価値観や人々の思いを自分と重ね合わせたり、社会のあり方にまで目を向けたりしていく。このような姿は、題材を通して子どもたちが自らの価値観やものの見方をより豊かにしている姿である。

45 子どもたちが繰り返し言葉の世界に浸ることで、思いや考えを他者とわかり合えることの喜びを味わいながら、言語感覚を磨き、自らの価値観やものの見方を豊かにしていくことを願っている。